



○ 直筆

『直筆』は、「最上のコミュニケーション」という題で歌手の小林幸子さんが書かれた文章を読む機会がありました。日本の文字の綺麗さや友人・ファンの方との交流のことなどについての内容でした。ここでは詳しい内容の紹介や気づきについては省略しますが、読みながらふと思ったことがあります。文章に書かれていたこととは少し観点が違います。

学校という職場に勤めていますから児童生徒や学生のいろいろな作品を見る機会があります。小学校の児童たちは鉛筆などで文字を直筆することが多いでしょう。現在パソコンが生活に浸透しており、成人となった学生はレポートを活字で仕上げたりもします。私は昔、覚えなければならぬものをひたすら書いていました。まっさらな紙はもったいないので広告の裏などですね。

さて、手書きの作業には個性が表れます。決して上手ではないけれど一生懸命丁寧に書かれたもの、上手すぎて(?)読めないものなど、いろいろです。中には書いた本人でも読めないのではなかろうかというほど乱雑なものもあります。こうなると自分の学びとして内容が身につかないのではなかろうかと心配してしまいます。

伝えたいこと、直筆するときは美しさよりも丁寧さ・誠実さを心掛けてほしいということです。

○ 自校自賛

YC 校の玄関 横の花壇にはチューリップの球根を植えています。このたび芽が少し出始めているのを見つけました。寒さはこれからが本番ですが、もう春の気配も感じられます。新年度新入生の皆さんを歓迎する花たちはどのような色彩を見せてくれるのでしょうか。

寒い時期に咲く花で私たちの目を楽しませてくれるものの一つにスイセンがあります。球根を植え替えて世話をした方がよりきれいな花が咲くそうですが、我が家ではほったらかしなのによく咲いてくれます。昔伊豆半島の南、石廊崎というところを自転車で訪ねたことがあります。スイセンが群生しているのが有名です。正月明けくらいの時期で天城峠は凍っていましたが峠に着いたときの美しさに寒さを一時忘れて感動したことを思い出します。もっと昔小学生の頃、スイセンという響きが水洗トイレを連想させてみんながはやし立てていたことを思い出しました。その頃はほとんどの家に水洗トイレはまだなかったと思うのですが、裕福な家庭をうらやましく思ってそんな言動をしていたのでしょうか。

窓にはペット学科の授業で制作した紙工作の立体を吊してみました。中に電球を入れればランプシェイドとして使えます。ただ白熱電球のような熱を発する照明だと焦げて焼け、火事になる可能性がありますので余裕のある大きさと風通しのよい形状を工夫しなければなりません。今はLEDが普及していますので少しは安全かも知れませんが、この写真の撮影にあたって、窓なので内部からだ逆光になり外からだ景色を反射してしまいますので、ちょっと難しいモチーフでした。

